

編集後記

平成 29 年度の体育研究所雑誌が完成しました。本年度は体育研究所設立 55 周年にあたります。そこでこの節目に体育研究所の歴史を振り返ってみたいと思います。

体育研究所は 1962 年に設立されました。設立当時は栗本義彦所長、松岡脩吉主任、正木健雄、山田良樹氏、圓吉夫所員という布陣でした。そして 1971 年に東京大学医学部公衆衛生学教室より本学教授に招聘された松岡脩吉教授が所長に就任し、本格的な活動がスタートしました。体育研究所の事業報告としての日本体育大学体育研究所所報は、松岡所長誕生の 1 年後である 1972 年に発刊されました。その当時の報告・研究内容は野外実習の調査研究や部活動における体力測定が主でした。その後、体育研究所からの事業報告書はほぼ毎年発刊され、現在は 41 巻を数えるに至ります。

1962 年に体育研究所が設立されて以来、体育研究所において取り扱われてきた研究は、大きく分類すると子どもに関する研究、競技力に関わるハイパフォーマンス研究、スポーツ社会学をはじめとするスポーツ文化研究、健康に関する生理学的・生化学的基礎研究に分類されます。ところが、2015 年度にオリンピック・スポーツ文化研究所を設立したことで、スポーツ文化に関する研究はオリンピック・スポーツ文化研究所が取り扱うこととなりました。さらに本学トレーニングセンターとの共同で 2014 年度より取り組み始めた日体大アスリートサポートシステムの取り組みは、来年度よりハイパフォーマンスセンターに引き継がれることとなります。体育研究所で取り扱ってきた課題が付置機関として独立していくことは、体育研究所が日体大において研究分野で果たしてきた役割の大きさを示していると感じます。今後も体育研究所で取り扱ってきたテーマが独立した付置機関としてさらに大きく成長するように研究活動の活性化を図って参ります。

一方でこれまで体育研究所が取り扱ってこなかった重要な課題も存在します。人類が体験したことのないような超高齢社会にすでに突入している本邦において、健康寿命延伸に関する研究は極めて重要な位置づけにあります。厚生労働省が 2011 年に五大疾病として位置付けたメンタルヘルス、がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病の全てに対して運動が有効であることが直接・間接的に証明されています。今後日本体育大学において健康に関わる基礎研究を行うことは極めて重要であることは言うまでもありません。ただし体育研究所ではそのような研究に正面から取り組むことはありませんでした。これは時代背景の変化と体育研究所の研究課題との乖離が進んだ結果と言わざるをえません。他の側面からとらえれば体育研究所における研究課題の設定の見直しを示す事象であるともいえます。このような背景の下、今年度より体育研究所では健康寿命延伸に関わる研究を主要なテーマとして設定しました。取り扱う領域も基礎から応用、子どもから中高年といった幅広い研究活動をスタートさせました。

これまでの体育研究所と同様、今後も日本体育大学ブランディングの一翼を担っていけるような研究成果が得られるよう日々精進していきたいと思っております。

中里浩一